

# こころをつなぐまちづくり

人権シリーズ vol.33



大分地方事務局 人権擁護委員協議会優秀賞  
「うちの祖父とリウマチ」

国見中学校3年 阿南仁梧

うちの祖父はリウマチである。去年の秋のことだったと思う。それまで元気だった祖父が急に、手足の痛みをうったえだしたのだ。さすがにおかしいという事で病院に行つたところ、リウマチだということが判明した。

その時の事だ。祖父の弟妹に電話をかけてリウマチの事を話した。

「人にあんまりリウマチってこと、話したらいかんで。」

それがその人からかえってきた言葉だった。どういうことだろう。僕には理解できなかった。なぜ話してはいけないのだろうか。僕は母に聞いてみた。

「うーん…昔はいい薬なんかがなかったから、リウマチになつてしまうと手足が変形していびつな形になつて固まってしまうんだよ。それで昔は声を小さくして、あの人はリウマチらしいよっていつていたらしいね。そんなのわるいになあ。」

母はそう話してくれた。僕も母の意見に賛同した。意味がわ

からない。リウマチで、なにがわるいのだろうか。手足が変形したからなんだというのか。そういうのを差別というのではないか。

しかし昔はそういう差別が多かつたようだ。ハンセン病もその一つである。ハンセン病は、天刑病といわれた。天刑病は、昔の説話集や仏教の経典などで「禁じられた行いをしたものは仏の罰としてハンセン病をわずらう」などと書かれていた。これからハンセン病は天から受けた罰であると考えられていたそうだ。

こういう間違つた知識のせいでどれほどの人々が差別を受けてきたのだろうか。このハンセン病は顔が変形したり、はれたりする。そう、顔の変形や、はれただけなのに、どれほど多くの人々が苦しめられたのだろうか。

ではなぜ、人々は差別をするのだろうか。差別されてうれしい人間などいるはずがない。なぜ差別をするのか。それは自分

達と違う人に対して「おかしい」という感覚があるからではないだろうか？ 実際おかしくもなにもないのだ。その差別の対象になつてゐる人も、ねて、起きて、食事をして生きてゐるのだ。その人達を「おかしい」といつてゐる人こそ「おかしい」のではないのだろうか。これでは名乗りだしたくても名乗りだせない。事実、いまでも名乗りだせてない人もたくさんいる。これは差別されてゐる側だけでなく、差別されてゐる側にもいえることだ。

「自分達はおかしいのだ。とても恥ずかしい人間なのだ」

こういう認識をしてはいけないのだ。自分で認めてしまつては否定もできなくなつてしまふ。だからまず、病気の事をかくさずに堂々としてゐるべきだと僕は思う。たしかにそれは勇気のいることかもしれない。でもそうしないかぎり差別はなくならないのではないのだろうか。こそこそかくそうとするから余計に差別が起きるのではないだろうか。

実は先ほどの弟妹の人もリウマチである。その人はずっと恥ずかしいと思ひこみ、ずっとかくしてゐたのだ。今後はぜひやめて、堂々としてほしい。そし

て僕達、今の子どもが、堂々とできるような社会を作つていきたい。

## お知らせ

同和問題学習会(隣保館)

2月18日(水) 午後2時～4時

ビデオ上映会(隣保館)

2月19日(木) 午後2時～

問い合わせ

国東市隣保館

☎0978-68-1722

## 人権相談のお知らせ

みなさんが、これは人権問題ではないだろうかと感じたり、困りごとや心配ごとがありましたら、法務局や人権擁護委員にご相談ください。

相談は無料で、秘密は固く守られます。

開設日 月曜日から金曜日(祝日・年末年始を除く)

時間 8時30分～午後5時15分

場所 大分地方法務局杵築支局

担当者 法務局職員・人権擁護委員

問い合わせ

大分地方法務局杵築支局

☎0978-62-2271